



北大山の会

会 報

空沼小屋修復事業報告抜粋版

第 120 号 2017 年(平成 29 年)10 月

空沼小屋修復事業の終了

会長 小泉 章夫 (1974 年入部)

「寒冷の系譜」刊行に始まって、現役隊のカムチャツカ遠征、東京での祝賀会と続いてきた一連の北大山岳部創立 90 周年記念事業は、空沼小屋の修復と再開をもって終了しました。

空沼小屋の再開に至る経緯について少し述べます。発端は 2003 年 6 月に、当時、現役部員だった三木君と市川君が空沼小屋の沼側への傾きについて山岳部

長であった私に相談に来たことでした。それを受けて北大施設部と建設業者を交えて現地を視察しました。このときの見積もりは基礎工事と下部の丸太を交換して積み直す工事で 2000 万円弱でしたが、財源のあてはなく、そのまま経過観察となりました。2006 年に西安信会長が現地を視察して小屋を一時閉鎖するよう北大学務部に進言し、10 月に一般の利用が停

120 号の目次(抜粋)

空沼小屋：修復事業の終了	会長 小泉章夫(1974 年入部)	1
空沼小屋：修復事業の経過と今後の課題	空沼小屋の保存を考える会会長 安間 莊(1955 年入部)	2
空沼小屋：修復工事完了報告	空沼小屋の保存を考える会幹事 井上孝俊(1966 年入部)	3
空沼小屋：全体日程報告	森田英和(1973 年入部)	7
空沼小屋：スイス大使と公使の来訪に対する対応報告	岩間和人(1970 年入部)	9
空沼小屋：彬子さま対応ほか	高篠和憲(1972 年入部)	11

止されました。

2007年西会長が会報100号で会員への意見聴取を行い、それに応じて精力的に行動を開始したのが安間荘会員でした。ヒンデルの研究者であった北大建築の角幸弘教授と角研究室出身の建築家、照井康穂さんの協力を得て、小屋の倒壊防止の応急工事を2007年9月と2009年9月の2回に渡って実施、北大へ修復工事の依頼、また、創建時に施工を請け負った伊藤組へ協力を要請しました。2009年10月には「空沼小屋の保存を考える会」を立ち上げて、マスコミを通じて市民に向けた保存運動のアピールも行いました。

小屋閉鎖からの10年間、北大の執行部、学務部は幾度か担当者が交代しましたが、修復を見通した協議にはなかなか入れませんでした。北大として、秩父宮家からいただいた文化財との認識はあっても、限られた予算の中で、空沼小屋の修復・維持の優先順位は低いままで、学務部が所管する山小屋を利用する学生の増加が見込めない状況で、数多くの山小屋を維持していく意義を理解できないようでした。

2013年、山口総長の体制になり、初めて、理事会、学務部との実質的な協議が始まりました。2014年には伊藤組土建からピンファウンデーション工法の提案と実験が行われ、北大との折衝も約2000万円の工事費用の積算、フロンティア基金を使った寄付方法など、かなり具体的になりました。しかし、この年の10月の大雨で周辺の林道が崩壊し、工事は延期を余儀なくされました。

2015年、保存を考える会に現場経験豊富な井上（ぼんた）会員が加わり、工事方法を見直して、トイレを予算に含めることができました。国有林、環境省との調整、北大との協約書の取り交わし、募金を本格的に開始して北大に寄付、2016年6月から、

隣接する万計山荘の協力を得て、伊藤組土建が基礎工事を行ったのはご承知の通りです。

この間、安間会員からは数度にわたって空沼小屋修復を山の会の事業としたい希望が述べられたように思います。当初、山の会の反応は鈍いものでした。創立部員たちが建設から関わったヘルヴェチアヒュッテと比べると、戦後、スキー部から山岳部へ移管された空沼小屋への愛着を持つ会員が少なかったことのほか、現役部員が減少する中で、高齢化していく山の会が2つの山小屋の維持に責任を持ち続けることはできないという懸念もあったと思います。しかし、安間会員の、空沼小屋を現地で維持して次代に伝えるという信念に基づいた粘り強い行動に共感する会員も増え、活動を支援することが2015年の総会で議決されました。さらに、支援部隊に井上会員をはじめとする空沼小屋のヒュッテンレーベンの思いをもつ会員の参加を得て、2016年の総会で90周年記念事業とすることが決定し、今年7月の再開式典まで一気に動いて来ました。

再開式典では、秩父宮家ゆかりの彬子さまにおいで頂き、おじいさまの三笠宮さまが宿泊された当時と変わらない空沼小屋のたたずまい、2階の窓からは木々を映す万計沼の景色を楽しんでいただけたことを嬉しく思います。また、思いがけず、スイスのパロ大使、ネルソン公使にもご臨席いただきました。ヘルヴェチアヒュッテの建設者の1人であったアーノルド・グブラー会員の存在、2012年にヘルヴェチアヒュッテを訪問したベルンハルト・グブラー夫妻との交流があってこそその訪問であり、AACHとスイスの因縁を改めて認識した次第でした。

維持・管理の方法など、まだ解決すべきことはありますが、それらについてはこれから考えるとして、今は空沼小屋の再開を皆さまと喜びたいと思います。

空沼小屋

修復事業の経過と今後の課題

空沼小屋の保存を考える会会長 安間 荘（1955年入部）

1928年故秩父宮雍仁（やすひと）親王の出資で作られた空沼小屋は、永年に渉る基礎束柱と土台の腐食に伴う建物の傾斜・不陸で倒壊の危険性が予測されたため、2006年秋以来閉鎖されておりました。

2009年に「空沼小屋の保存を考える会」が結成され、北大当局と空沼小屋の修復・再開について度重なる協議を行い、2016年2月9日に北海道大学総長と空沼小屋の保存を考える会会長との間に「空沼小屋

修復に関する協約書」を締結することができました。協約書の要点は次の5つです。

- 1) 修復費用（概ね二千万円）を考える会が募金で調達し、2016年4月12日までに北大フロンティア基金に寄付する。
- 2) 北大はこの寄付金を原資として修復工事を行う（2016年6月初旬着手・同年9月末完成を目指す）。
- 3) 設計資料は考える会が無償で北大に提供し、北大

はこれを資に設計図書を作成し、一般競争入札で発注する。

- 4) 2016年4月12日までの寄付者については、考える会提供の寄付者名簿に基づいて、北大から個別に寄付金控除証明書を発行する。
- 5) 空沼小屋の有形文化財登録については、修復工事終了後に別途、北大と考える会が協議する。

今回の空沼小屋修復工事は、1) - 4) に関わる部分について行ったもので、2017年7月2日(日)10時30分より現地万計沼湖畔において、ジャン＝フランソワ・パロ在日スイス大使、ピーター・ネルソン公使、三笠宮彬子様のご臨席のもと、めでたく空沼小屋修復・再開式典を行うことができました。

今回の修復工事の経過報告については考える会事務局長の井上孝俊から、会計報告については考える会会計担当の高橋一穂から別項のようにありますのでご参照ください。

これまで物心でご援助いただきました皆様方に心から御礼申し上げます。

今後、「空沼小屋修復に関する協約書」の5)の項目について、引き続いて北大当局と協議を進める予定であります。

北大の所有する5つの山小屋(テイネパラダイスヒュッテ、ヘルヴェチアヒュッテ、空沼小屋、無意根小屋、奥手稲山の家)は、いずれも1920年代にスイス人教師・建築家と北大教師・学生らの間で検討され

たHütten Kette「山小屋の鎖」構想に基づいて建設されたものです。

このうち、スイス人建築家マックス・ヒンデル設計のヘルヴェチアヒュッテと空沼小屋は、建設当時の姿がそのまま保存されており、建築史的にも高い価値を有していると言われています。

この二つの山小屋は、無形の「山小屋の鎖」構想の重要な物証でもあります。これらのことを踏まえて空沼小屋とヘルヴェチアヒュッテを、歴史的価値を法的に担保する「有形文化財」として登録することが必要と考えます。

使いつつ保存するという考え方でこそ、本当に長く保存できるのではないのでしょうか。そのためにはしっかりした普段の管理体制・管理手法が必要です。

要は皆様にできるだけ気持ち良く使っていただくことが大切です。

北大の所有する山小屋は、いずれも学生の課外活動支援のための施設と位置付けられているため、土日あるいは前後連休の場合のみ開放(小屋番に学生バイトを当てるため)を原則としています。したがって平日の利用は、(無償の)小屋番が見つからない限り難しいのが現状です。

学内関係者だけでなく学外の平日利用希望者の便をはかるためには、平日の小屋番体制をどのように組むか、利用料と管理経費を含めて北大学務部と協議し、対応方法を検討しておくことが望まれます。

空沼小屋

修復工事完了報告

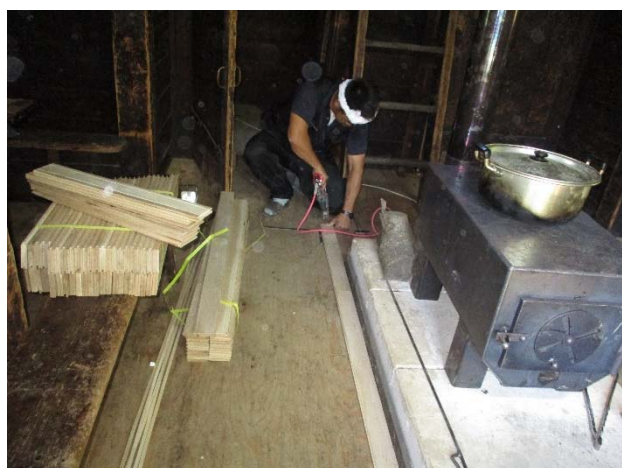
空沼小屋の保存を考える会事務局代表幹事 井上 孝俊(1966年入部)

前回の会報(第119号)で北大が伊藤組土建に入札工事として発注した修復工事について報告した。当初は9月末に竣工する予定であったが腐朽した土台が取替えられていないとの山の会の指摘により、その手直し工事のため結局2週間ほど遅れて2016年10月12日10:00から北大施設部の施工管理を担当した設備課が完成検査を実施して伊藤組土建の施工範囲は全て終了した。当初から山の会OBと現役でできることは自らの手で修復したいと考えていたので伊藤組土建の工事が竣工するのを待ってフローリングの貼り付けなどの工事を始めるべく準備を進めて

いた。その第一弾は1966年入部の同期会を修復工事のお手伝いを目的に空沼小屋で開催したことは前号で報告した。

第二弾は10月末に計画していたが冬の積雪が思ったより早く来てしまったので翌年に繰り延べすることになった。それらの伊藤組土建との契約工事から外した業務(残工事)の項目と工程表を表-1に示す。5月は簾舞林道の積雪状況により資材の車での運搬ができないため工事の準備作業と5月28日に小屋の状況調査に行き工事ができることを確認して6月の工事予定を計画した。その工事内容を順次報告する。

- ① 什器備品設置は主には流し桶、ベッド、机。これらは1958年佐々木ロタさんらが作成して設置したようだが木製の流し桶は古く使いにくいのでステンレス製のものに取替えた。ベッドは管理人室をバイオトイレ室に作り替えたため廃棄処分とした。机は落書きが小屋の歴史を物語っているのとまだ使えそうなのでグラインダーで表面を綺麗にして再設置した。食器、台所用品、ガス台などもそろえた。
- ② フローリング工事は見映えの点からも本職の大工さん一人に**(写真-1)** 来てもらった。流石に手際もよく、OBも6人であり目立たないところのフローリングを貼ったが大工さんの貼った面積の半分以下だった。貼った後のワックスの下地塗布、仕上げ塗布などはOBの手で実施した。**(写真-2)**



(写真-1)



(写真-2)

- ③ ソーラー設置はバイオトイレの小容量のものには手動式やペダル式のものもあるが定員30人の小

屋を考慮して使用目安1日80~100回のSW-43型を取り付けた。そのためおがくずの量が大容量となった。このため電動式の必要がありその電源が必要となった。小型の発電機を用意する予定だったが、静寂な夜中に発電機稼働させることと日常的な燃料供給の問題から太陽光発電を取り入れることにした。

空沼小屋は国立公園第1種特別地域に位置しているためソーラーパネルを設置するのでもまみらず外壁に1枚取り付けすることで許可をもらった。

(写真-3)



(写真-3)

- ④ 電気配線工事はソーラーパネルから蓄電池までの配線、蓄電池から配電盤を通してのソーラー電源と太陽光発電が不足の場合の発電機電源の2回路から室内に電気を供給できるように電気配線をした。電気配線工事は専門業者に外注工事とした。1KWの蓄電池を4台設置して**(写真-4)** 照明とバイオトイレ、給水用井戸ポンプを主に稼働させることにしている。



(写真-4)

- ⑤ 土台補強金具工事は基礎が新設され上に乗る土台も新しいものに取替えて再構築したので建物の安定計算は不可欠である。風圧にはOKであったが地震には補強が必要となったために補強用の金具

を急遽購入し縁の下にもぐって取り付けた。

- ⑥ 窓ガラスは割れたまま長年放置されていたが、今回窓枠ごと札幌市内のガラス屋さんに持ち込み直してもらった。割れていた窓ガラスは10数枚あった。

1階から2階に上がる垂直の階段を皆さんご記憶されていると思いますが、年寄や子供には垂直の上下は厳しいので70度ほどに傾斜を付けた階段に改良しました。玄関から靴脱ぎ場に行くとところもステップが高いのでステップ用階段を置きました。

- ⑦ 薪、不要材片付けは7月2日にオープンセレモニーが決まり、しかもスイス大使と更に宮家も来るかもしれないとなって山の会の内輪の式典と言う訳にはいかなくなり、小屋の東側の広場を式典会場にするべく修復工事の残材や乱雑になっていた薪や材木類を燃やしたり、綺麗に積み直したりして式典の後にも良いBBQパーティ会場です。

- ⑧ 土台下半割材設置は今回の基礎の束丸太を亜鉛メッキのターンバックルで結束しているのですが縁の下には金物が丸見えで小屋の外観を損なっていた(写真-5)。そのため丸太の半割材を並べて縁の下が見えないようにした。お陰で冬の雪囲いにもなるので縁の下は薪や資機材の倉庫としても利用できるようになった(写真-6)。



(写真-5)



(写真-6)

- ⑨ 外壁防腐剤塗布工事は外壁がかなり傷んできており、これ以上腐朽が進まないようにまた外壁が本来の材木色を取り戻すように防腐剤としては最高に高価な浸透性のキシラデコールの#103 チークの色調のものを採用して外壁全面に塗布した。

足場を作成すると大変な工事になるところを山岳部の高所に強いところを生かして高いところも全てはしごで作業した。(写真-7) 外壁がお化粧されたことで小屋が若々しくよみがえったような気がしたのは私だけではなく皆さんに好評だった。

- ⑩ ステンレスの流し台と井戸ポンプを設置して今までのように川に行かなくても洗い物も料理もできるようになった。排水路工事は最も悩ましい工事で、排水が万計沼に流れ込まないように、また目立たないように川に向かって浸透しながら排水されるような排水路を設置した。



(写真-7)

- ⑪ 過去には手動の給水用井戸ポンプを設置して使用した時期もあったようだが、太陽光発電による電動の井戸ポンプを設置した。水源は大きな声では言えないが勿論万計沼にカヌーを浮かべて給水パイプを沈めた。ところが二つの問題が発生した。一つ目は給水パイプが軽量のため沼の水面に浮かぶことがわかった。二つ目は先端に錘を付けて沈めたが沼の底に相当の厚さで泥が溜まっているらしくポンプを稼働させた途端パイプの中もポンプも泥でいっぱいになった。一つ目の問題はパイプの先端だけではなく途中にも錘を付けて解決したが、二つ目はポンプの清掃にも手間取ったうえ蛇口のスレーナーに泥が詰まっているのに気が付かなくて、結局蛇口をスレーナーのない単純なものに変えたことで水が正常に出るようになった。

のは式典ぎりぎりだった。

- ⑫ 橋の設置。登山道を登ってきて万計沼から流れ出る川を小屋側に渡るところは川の中の飛び石を伝って渡るのが当たり前だったが、今回は賓客を迎えることになるので、修復工事の残材にあったちょうど良い角材で橋を作成した。この橋はロープで岸の樹木と結んであるので水かさが増して流されてもすぐ復旧できるように工夫している。
- ⑬ 簾舞林道整備について。途中で排水の良くないところで道がぬかるんで車の通行に支障のある箇所も見受けられたので人力で補修できるところは補修した。またこの林道を管理している石狩森林管理署の署長が北大の林学の出身で式典にも参加していただいた。林道補修にも気を使ってくださり特に悪いところには碎石を入れ、排水溝の整備もしていただいた。
- ⑭ 歩行路整備。万計山荘の裏までは車で来るので車の降りたところから空沼小屋までの歩行路で段差やぬかるみなどを整備することを計画していた。思っていたほど悪くはなく、ほんの一部に手を入

れた程度であった。スイス大使には長靴を用意していたが結局使うことなく本人の革靴で空沼小屋まで歩いて来ました。

- ⑮ 式典準備については⑫から⑭も修復工事というよりは式典準備の範疇ですが式典の前日に会場の整備、国旗の段取り、除幕式の段取り、当日の飲食の準備などなど何とか手拔かりなく間に合わせることができました。
- ⑯ 式典については空沼小屋看板の除幕式と式典参加者 70 余名の皆さんのにこやかな集合写真(写真-8)を掲載するに留めますが私にとっては修復工事が漸く終わったと実感できた記念すべき日でした。

伊藤組土建との契約外の工事に要した延べ日数は 16 日間で手を貸してくれた OB と現役の延べ人数は 166 人でした。



(写真-8)

表-1 空沼小屋修復(殘)工事工程表

[illegible]

空沼小屋修復工事の会計報告

空沼小屋の修復工事が終了したので費用についても以下に報告します。

「北大施設部が伊藤組十建に発注した金額（税込み） 18,900,000 円」

空沼小屋の保存を考える会からの支出金額

工事原資として北大フロンティア基金への寄付 (1) 19,100,000 円

募金費用	(2)	48,481 円
------	-----	----------

伊藤組土建との契約外工事のうち設備機器費 (3) 492,388 円

資材費 (4) 543,532 円

工事費 (5) 517,083 円

式典費用 (6) 123,699 円

合計金額	20,825,183 円
------	--------------

空沼小屋

全体日程報告

森田 英和 (1973 年入部)

空沼小屋再開に合わせ、7月1日（土）にスイス大使歓迎会を北大構内のファカルティハウス・エンレイソウで、続く2日（日）に記念式典を小屋のある現地で開いた。

二つの行事は「スイス・北海道友好交流記念事業」として位置づけられ、空沼小屋の保存を考える会が中心になって、東京、札幌の会員が連絡を取りながら日程を組んだ。

スイス大使歓迎会は1日、北大山岳館で開かれた。

北大山の会総会の終了後に行われ、本州各地から集まったOBも、多くが時折、雨が降る中、理学部北のエンレイソウまで歩いて移動して参加した。

会場となったのはエンレイソウ内のレストラン・エルム。貴賓が訪れるためか、数日前から建物全体のガラス窓の清掃や周囲の草刈りが行われ、レストランのマネジャーから喜ばれたほどだった。式自体は立席で、会場は約 110 人の参加者と賓客の随行者で大いににぎわった。

午後5時すぎ、駐日スイス大使館のジャン＝フランソワ・パロ大使とピーター・ネルソン公使が姿を見せた。次いで高橋はるみ知事、秋元克広札幌市長も訪れた。最後に空沼小屋と関係の深い三笠宮家の彬子女王殿下もいらっしやった。

来賓がそろい午後5時半、北大山岳部の松本伊智朗部長の司会で開会。山の会の小泉章夫会長が日本語と英語で開会の辞を述べた。次いで彬子女王殿下から大伯父にあたる秩父宮の発意で建築に至った空沼小屋の再開を喜ぶおことばがあった。

北大からは外国出張中の総長に代わって長谷川晃副学長が大学施設としての空沼小屋の再開に駆け付けた来賓らに対する歓迎の辞が述べられた。

これに対して、パロ大使が空沼小屋に関わった先人をしのびながらスイスと日本の交流が一世紀近くにわたり札幌で続いていることを踏まえ、歓迎式典への謝辞も込めた挨拶が英語で語られた。

会場が和やかになったところで、空沼小屋の保存を考える会顧問の角幸博・北大名誉教授が建築史上における空沼小屋などの価値を強調し、乾杯の音頭を取った。

場内のOBや山岳関係者らは来賓を囲みながら和気あいあいと歓談した。ネルソン公使は30年ほど前、北大に留学した経験があり、出席者と流ちょうな日本語で話していた。彬子女王殿下に三笠宮さまや、そのご兄弟の高松宮さまの道内での思い出話をするOBもいて、宮家と北大との交流の深さをあらためて感じさせた。

楽しい語らいが続く中、高橋知事と秋元市長がそれぞれスピーチ。空沼小屋の保存を考える会顧問の芳賀孝郎日本山岳会元副会長、北大山とスキーの会の長沼昭夫会長も壇上に立ち、秩父宮さまの業績や、学生時代の山行などに触れながら小屋再開を喜んだ。

スピーチの間、空沼小屋の保存を考える会の安間荘会長が1928年(昭和3年)の創建から現在に至るまで30数枚の写真で構成したスライドの上映をした。「山小屋の鎖」という構想で作られた空沼小屋やヘルヴェチアヒュッテ、パラダイスヒュッテなどが日本のスキー、登山の発達に寄与し、それが1972年の札幌冬季オリンピックにもつながったという意義を強調した。

歓談の最後に出席者は北大恵迪寮寮歌「都ぞ弥生」を斉唱。パロ大使やネルソン公使も肩を組んで斉唱の輪に加わった。会場は多くの来賓やOBらで約2時間にわたり盛り上がったが、北大山の会の西安信前会長が日本語と英語で閉会の辞を述べ、締めくくられた。

翌日2日、空沼小屋再開記念式典が札幌市南区簾

舞の万計沼ほとりの小屋で行われた。雲が多い空模様で雨が心配されたが、午前10時半の開会直前になって穏やかになった。

前夜の主賓であるパロ大使、ネルソン公使、さらに彬子女王殿下も引き続き参加。それぞれ朝早く宿泊先のホテルを車で出発。途中から山の会OBの運転する車に乗り換え、急こう配でこぼこの多い簾舞林道を登って来られた。北海道森林管理局や環境省北海道地方環境事務所の関係者らも含め約70人が参加した。

小屋東側の広場が会場になり、万計沼に向かっていす席、その前に演壇が設けられ、日本とスイス両国の国旗も張られた。

司会は北大山の会の前田仁一郎理事。まず、主催者である空沼小屋の保存を考える会の安間荘会長が昭和初期の創建から多くの登山者を受け入れて来た小屋が老朽化したのち、ようやく再建までこぎつけた歩みを振り返り、修復事業の協力への感謝を込めてあいさつした。

続いて、パロ大使が英語で小屋創建当時、建築家マックス・ヒンデルや北大予科ドイツ語講師アーノルド・グブラーらスイス人の残した足跡を紹介し、90年余にわたる札幌での両国の交流をたたえた。

修復工事は10年以上前からの紆余曲折を経て完工したが、その歩みを空沼小屋の保存を考える会の井上孝俊代表幹事が報告した。本格的な工事は昨年从今年にかけて行われ、腐朽した小屋の土台を直すため、「曳家」(ひきや)と呼ばれる工法を採用し、小屋をそのまま水平移動して基礎を修復したうえで元の位置に戻した経過や、床板張りや外部の防腐剤塗布などはOB、現役が自ら汗を流して取り組んだことを強調した。



空沼小屋再開記念式典で看板を揭幕するパロ大使と安間会長。大使の傍らで拍手する彬子女王殿下や小泉会長

報告終了後、小屋看板の除幕が行われた。演壇横にパロ大使、安間会長が並び、さらに彬子女王殿下も傍らにお立ちになった。大使と会長が二人の中央に置かれている看板の白布を共に引くと、白木に「空沼小屋」と書かれた看板が姿を現した。温かみのある書体で、北大山の会の高篠和憲会員が筆を取った。看板を囲んで出席者全員で記念撮影もした。

出席者一同は北大山岳部部歌「山の四季」を合唱。夏の万計沼の湖面に、はつらつとした歌声が響いた。山の会の小泉会長が中締めあいさつをした後、彬子女王殿下はお帰りになったが、会場ではビールや軽食を楽しみながらの歓談が続いた。

空沼小屋

スイス大使と公使の来訪に対する対応報告

岩間 和人（1970 年入部）

空沼小屋再開の責任者である井上会員がネパール遠征で不在中の 5 月初めに、在日スイス大使館の大使と公使が再開記念会に来札されるので対応するようとの依頼メールが安間会員から札幌の会員に届き、「空沼小屋の保存を考える会」の会員でもある森田、高橋（一穂）、岩間の 3 名が急遽、大使対応 WG を設置して対応にあたった。当初は様々な指示が在京会員からメールで届いたが、在札会員の対応能力を超える指示が多く、6 月以降は、大使館と岩間が電話やメールで直接やりとりして大使の在札日程を調整した。

7 月 1 日。大使と公使を 3 時に空港で出迎え、3 日間チャーターした東邦交通のハイヤーで札幌グランドホテルに移動。車中で 3 日間のスケジュールをお二人に説明した。しばし休憩後に、スイス大使歓迎会会場の北大エンレイソウにハイヤーで向かった。エンレイソウ前では北大学務部学生支援課（山小屋管理を担当）の富樫課長と藤野課長補佐が臨時に設けた駐車スペースに小雨の中で誘導してくださった。長谷川副学長、小泉会長、安間会員がスイス大使を出迎えた。

歓迎会開始前にエンレイソウ 2 階会議室で高橋はるみ北海道知事と大使とが面談した。公務に多忙な知事との面談や歓迎会参加を実現することが在札会員の力では難しく、在京会員の援助を受けて実現した。20 分ほどの短時間であったが、知事には英語通訳が同席し、記念品交換や記念撮影も行われた。知事との面談終了直後に彬子殿下がご到着されて、大使と公使は、知事、札幌市長、札幌市議会議員、倶知安町議会議員、北大関係者らとともにエンレイソウ大会議室で彬子殿下に簡単な自己紹介を行った後に歓迎会会場に移動した。

歓迎会では殆どの挨拶が日本語で行われたが、事前に英訳した挨拶文を大使と公使に手渡しておいた。また、会場では西安信会員のぞんちゃん（千秋さん）が大使の脇で適宜、通訳してくださった。大使挨拶の和訳文も直前に大使館からメールで届き、会場受付で参加者に配布した。言葉の壁をなくすためにそれなりの努力をしたが、同時通訳可能な「ドラエモンの翻訳コンニャク」を欲しかった。なお、知事と市長には同時通訳者が控えており、彬子殿下は英語が非常にご堪能であった。



レストラン・エルムで開かれたスイス大使歓迎会。壇上で開会の辞を述べる小泉会長と、耳を傾ける彬子女王殿下(中央)、パロ大使(右端)とネルソン公使(右から 2 人目)

7 月 2 日。朝 8 時にホテルをハイヤーで出発。簾舞の林道ゲート前で小泉会長運転の 4WD に乗り換えた。林道は 1 週間前に小屋を往復した時に比べて格段に整備されていた。式典での安間会員の挨拶と井上会員の工事報告は日本語であったが、歓迎会と同じく英訳文を大使と公使に渡してあり、また、西千

秋さんが大使の脇で通訳してくださった。除幕式後の昼食はコンビニのサンドイッチのみと聞いていたが、お握り、クラッカー、チーズなど盛り沢山で、大使と公使は堪能されていた。

昼食後に小泉会長の車で林道ゲート前まで降り、ハイヤーに乗り換えてヘルヴェチア小屋に到着。彬子殿下をお送りした高篠会員がすでにヘルヴェチア小屋に待機していた。小泉会長、安間、佐々木幸雄、西安信および浜名会員らとアフタヌーンティーを楽しんだ。佐々木会員の奏でる笛の音が小屋に響き、大使はスイスの山小屋を思い出されたようであった。小泉会長、安間会員以外とは小屋で別れ、朝里峠経由で小樽に。

小樽ではまず天狗山に。ロープウェイ乗り場では霧で山頂が見えなかったが、山頂に着くと霧が少なくなり、港を眺望できた。その後、小樽オルゴール堂2号館に行き、展示してあるスイス製オルゴールを特別に演奏して貰った。大使は、スイスからはるかに離れた小樽で自国製のオルゴールの音を聞いて驚いておられた。港を散策した後、小樽在住の越前谷会員主催の夕食会に。小樽政寿司本店で店主自らが握る高級寿司を堪能した。

7月3日。東京での急な公務のために大使の離札が午後1時に早まり、スイスのサンモリッツと姉妹提携している倶知安町の町長らとの昼食会が中止され、午後に予定されていた札幌市長との面談も公使のみで行うことになった。朝8時にホテルを出発して、まず山岳館を訪問。小泉会長、安間会員と山岳館運営委員長の小野寺会員から北大山の会の歴史や館内展示物の説明を聞いた後に、小泉会長が山の会からの記念品を大使に贈呈した。続いて、北大総合博物館で副館長の大原教授から北大の歴史や各学部の概要の説明を受けた。その後、北大本部で総長代理の笠原副学長（国際連携担当理事）と面談し、今後の研究交流について意見交換した。記念品の交換と記念撮影が行われ、後日、北大ホームページに訪問写真が掲載された。最後に、北大教員との学術交流会（農学部会議室で開催）に参加した。人獣共通感染

症リサーチセンターの喜田宏特別招聘教授、農学研究院の中村太士、荒木仁志、愛甲哲也、笠井美青の教員が北大で行っている自然保護や災害保全の研究分野について説明した。スイスの大学との交流実績が最も豊富な工学研究院の村井祐一教授は海外出張で参加できず、私が交流内容を説明した。各教員の説明が豊富で、用意した時間があっという間に過ぎ、最後に予定していたスイスの大学と北大との研究交流計画について大使に相談できなかったのが残念だった。大使は大急ぎで森田会員同乗のハイヤーで千歳空港に向かい、予定した飛行機に間に合った。午後は札幌市庁舎で札幌市長と公使との面談が2時から行われた。公使は北大に1年間留学しており、また公使としての在日期间も長く、日本語が非常に堪能で、面談は全て日本語で行われた。2026年の冬季オリンピックにスイスのシオン市と札幌市がともに立候補しており、両市が談合してうまくやろうとの笑い話もあった。

この3日間の大使訪問は空沼小屋の再会式典参加が主目的であったが、大使は昨年秋に着任し、北海道訪問は初めてであり、この機会に北海道、札幌市、倶知安町の首長や議会議長らと話し合えたことを、大変喜んでおられた。また、北大の研究内容について知ることができ、スイスの大学との今後の研究交流をより盛んにしたいと話されていた。当初は、北大山の会が独断で大使らを招待したことに北大執行部が反発して、歓迎会や式典に北大執行部が全く関与しない可能性があったが、学務部学生支援課の富樫課長、藤野課長補佐が執行部を説得して、副学長の参加や面談が可能となった。小屋はあくまでも北大の所有物なので、今後、北大山の会が小屋関係の行事等を行う場合には学務部や執行部との折衝を円滑に進める必要がある。最後に、スイス大使の在札日程調整にご尽力いただいた道市町の連絡担当者、ならびにスイス大使館文化・広報部の広瀬綾子様に深謝する。

高篠 和憲 (1972 年入部)

前回の会報で「彬子女王殿下をご案内（空沼小屋訪問に向けて）」で書かせていただいた通り、昨年彬子さまの空沼小屋の訪問希望で来札した折に小泉会長と説明をした縁で、今回の再開式でのご出席のため、宮内庁三笠宮宮付と連絡を取りながら打合せを重ね、当日の案内役担当となった。

彬子さまの式次第でのスピーチは？現地での昼食は？服装は？と次から次へと宮様対応など経験ない我々は、宮内庁に何度もやりとりしては当日のスケジュールを調整し、分刻みのスケジュール案で備えた。まず再開式の題名から問題あって、スイス大使の歓迎会という事でスタートしているが主賓でもある彬子さまの名前が出てないのは拙いという事でもめたが、宮家ではそのままで彬子さまはその席の来賓挨拶で良いという事であっさり了解してくれてまず安心。現地でも看板除幕式の立ち合いだけで「おことば」は話さないという事でこれも解決。その他食事などもこちらのセンスで構わないなど、思ったより気さくに了解していただいた。かえって警護の道警や所轄の各警察署からは参加者名簿や次第などの資料請求や問い合わせが何回もあって苦労した。また今回彬子さまは北海道青少年科学文化財団という肩書なので昨年から財団の専務が中に入って交渉や指導を頂き、ホテルや空港からの送迎も担って頂き大いに助けられた。

7/1 スイス大使歓迎会である北大のレストラン「エルム」には10分前、時間通りに来館され知事・市長、スイス大使と面会后スタート。主催者の小泉会長の開会の辞のあと、彬子さまから「おことば」をいただく。宮家と設立からゆかりのある空沼小屋の歴史や思い、我々の完成までのねぎらいなど、心のこもったスピーチをよどみなく話され一同感激する。ついで北大副学長の歓迎の辞、スイス大使来賓挨拶。道知事、札幌市長のスピーチそして乾杯。その後もずっと立ったまま来賓客や先輩方と親しく会話された。彬子さまの先導役をおこがましくも私が担ったので、脇で客紹介や解説を務めた。彬子さまは保存の会の安間会長のスライド上映まで1時間以上滞在され、色々な方と対話されて、お茶を飲む程度で食事は手をつけられなかったようだ。

歴史ある空沼小屋が修復されての祝いとねぎらいの気持ちがこめられた素晴らしい式であった。VIP

対応や格式のあるイベントには慣れない我々スタッフは皆かなり気を使ってお疲れ。終了後2次会はツルへと皆を誘ったが、翌日の小屋現地再開式が控えているという事もあって行ったのは小泉会長と清野君（1976年入部）と私のみ。明日林道で偉い人を乗せるのだから飲み過ぎないようにと皆に厳しく言われたので早々に帰る。

7/2 空沼小屋の再開式。殿下は営業車でふもとの簾舞森林事務所に時間通りに来られ林道を私の運転で走る。後続は道警の警護が遅れないようにと追いかけて来る。途中小屋の修復の苦労話や森や木の事、北海道の山や山岳部の気質など道中約30分を飽きさせないようにと話題提供した。ついでに図々しくも自分の会社で納めた土台の木材やフローリングや看板、設計した鉄板ストーブなどのPRも忘れなかった。小屋には開始30分前に到着し記帳後小屋を見学。

式は10時半スタート。司会の前田幹事のリードで安間保存の会会長とスイス大使の挨拶後、井上代表幹事が工事報告。メインセレモニーは大使と安間会長が先導し、両脇に彬子さまと小泉会長が立たれて看板の除幕式。看板は銘木ウダイカンバの耳付きの厚板で揮毫は私が。隷書という注文で、少々コミカルに描いたが板の縁が自然のカーブでバランスが難しく少々不満の出来。だが皆も褒めてくれて拍手の中、除幕された。

セレモニー後の記念撮影では彬子さまも気楽に中に入って頂き、現役の学生や地主である国有林の幹部や環境省の女性レインジャー、隣の万計山荘の会員や最後まで修復の仕上げで苦労したOBスタッフ含めて60名以上が並んだ。

彬子さまは小屋周囲や沼を撮影され、空沼小屋やお爺様である三笠宮さま（崇仁親王殿下）が泊まれたというこの小屋をしっかりとご覧になっていた。また小屋の中に入られては元定山溪営林署長でもあった渡邊定元先輩が小屋の由来やら小屋までの林道、高密路林道網を管内に張り巡らせた思い出話を聞かれていた。

彬子さまは1時間半ほど滞在されて締め乾杯の前に退席され、また私の車でお送りする。途中オクスフォードでの博士論文の話を伺う。欧米の博物館にある日本の歴史的な美術品の入手経緯がテーマだったという。簾舞で彬子さまや警護の面々一行を見

送り、やれやれ。

彬子さまをご案内するという、私にとっては名誉な事でもありまた良い経験をさせて頂いた。両方の式では長時間立ったままなので、さぞお疲れであった事と思う。お帰り後、宮付からは訪問できたことの感謝と、修復作業などのねぎらい含めてとても喜んでいられると伝言を頂いた。

彬子さまの対応以上に修復までの多くの労務提供された山の会会員諸兄、特に大使や来賓などの対応や式までの何回もの打合せで苦勞した小屋委員の労苦には敬意と感謝は言葉に尽くせない。素晴らしい連帯感をもってできた一大行事であった。本当にお疲れさま。